

短編。ブラックホットココア

南無三

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マスター、バーホーテンのココアをよく練って持って来い。ミルクと砂糖なし、ブラックで。

……これは、保登心愛の甘くてかわいい、心がぴよんぴよんする部分を少し削った。ほろ苦い心のうちを考察した物語である。

同時上映、『カフェ・コレット』

香風智乃の心愛に対する心境を考察した物語である。

目次

短編。	ブラックホットココア	1
二羽：	Th・Des Aliz・s	6

短編。ブラックホットココア

intro

マスター、ココアをよく練って持って来い。ミルクと砂糖なし、ブラックで。

……なあ、マスター。今頼んだブラック（砂糖なし）のココア、とブラックココアってのは別もんだってのを知り合いに聞いたんだが、本当だろうか？

なるほど、ブラックココアは製菓用の薄味の粉なのか。で、今マスターが練ってるそれが、ブラックのココア、ピュアココアとも言われているのか。博識だなマスター。

——コーヒーとは逆だな。ブラック（砂糖なし）の方が非主流で、「ココアは甘い物」ということが常識になってる。

お、練り終わったか。ありがとさん。

それで、甘くないココアの本当の味は……少しほろ苦い、けれども、香り高い。

言葉にしてしまえばコーヒーを飲んだときと同じような感想になっちゃいなあ。

いや、いくら俺でもコーヒーとココアの味が違うことぐらいはわかる。あくまで「表現上は」ということだ。

ん？どうしたウサ公、『話が見えない』？随分と芸達者な鳴き声だな。まあいい、俺が言いたかったのは——

Black hot cocoa

私は末っ子だ。

私には、『何でもできる』姉と、『できる』兄がいる。

兄たちは、何でもできる姉に負けられないようにと、一点特化の才を磨いた。

……私も、兄たちに倣えば、もう少しマシな心境であの家に入れ

たのかもしれない。

「きれい」

だが、幼い私は、その『姉』という存在に酷く憧れた。その『姉』を目指してしまった。

そして、絶望した。

私は、『何もできない』妹なのだ、と。

「かわいい街」

耐えられなかった。

姉の優しさが、兄たちの思いやりが！

私は姉と兄を愛している。嫌いに等なれるはずもない。

だから、彼らが私の無能を許す度、私の中にいる嫌な私がかなり立てた。

何もできない私、下位互換なお前はいらぬ子だ、と。

姉や兄にそんな意図がないのは重々承知していたが、私自身がそう思わずにはいられなかった。

猛毒となった家族愛（お姉ちゃんに任せなさい）は私を苛み、私はあの家で、自分自身を縊り殺したい衝動とともに生きていた。

だからきつと——

「ここなら楽しく暮らせそう」

——姉と兄のいない、この街なら。

.....

「私を姉だと思って、何でも言って!!」

私は、暗い欲求に支配された。

私が彼女にとっての『何もできない』姉になろうとした。

「だから、お姉ちゃん、って呼んで?」

逆説的に、彼女を私にとっての『何もできない』妹にしてしまうという事実を目を瞑ったまま、である。

だが、彼女は強かった。私などよりも、よほど大人で、しっかりと

していた。

私は、この家でも『いらぬ子』にはなりたくなかった。

.....

「ココアお姉ちゃん、ですね」

ああ、もう、私ここのうちの子になる。

歓喜の絶頂であった。と思う。

——私を姉だと思って、何でも言って？

『私を姉と思ってくれるなら何でもする』の間違いじゃないか。

.....ねじくれた承認欲求であることは私が一番わかっていた。

でも.....それでも私は、誰かの『姉』になりたかった。頼られて、慕われたかった。

C a f f e C o r r e t t o

「智乃ちゃん。この街、とつても素敵だね」

「私、この街に来てよかった」

「これからたくさん楽しいことがありそう」

彼女——ココアさんはそう言っただけ。

私は生まれてからずっとこの町に住んでいたもので、「いい街」と言われてうれしい反面、比較対象のない分実感が無い。

「ココアさん、よろしくお願いします」

こんな無愛想な私にも、彼女は満面の笑みを絶やさない。

この無愛想は祖父譲りだが、こうなったのは母が亡くなってからのことである。それまでの私は、母と同じでニコニコとよく笑う子だった。

ちょうど、このココアさんのように。

「お姉ちゃんとして頑張るね」

「.....やっぱりちよつと待っててください」

私がココアさんの事を『ココアお姉ちゃん』と積極的に呼ばないのは——

——きつと、私は彼女に、『母』を求めていたからかもしれない。
.....

昼間、出会ってすぐに、ココアさんは私の境遇を勘違いして私を抱きしめた。

この抱擁が、私に亡くなった母を連想させた。

父は私を愛してくれたが、母のように抱きしめてはくれなかった。男親としてはある意味当然であり、父を責める気はない。

私が母のぬくもりを求めていたことをいち早く悟ったのは祖父だった。

だからか、祖父は未だあの姿でそばにいてくれているのだろうと思っている。

ココアさんはしきりにお姉ちゃんぶろうとしていたが彼女は（後にわかったことだが）末っ子だ。故に、その行動はどこか詰めが甘く、抜けていたように思う。

そのどこか抜けたところは、また私に母を思い出させた。

.....

——チノちゃんをぎゅってして寝ようかな。

肩から首へ回される手と、背中当たる柔らかい感触。そして、ふわりと香るうちの（・・・）シャンプーの匂い。

まるで母だ、と一瞬思ってしまった。

この時はびっくりしてとっさにぬいぐるみを投げつけてしまったが、後に残ったのは、母とココアさんそれぞれに対する罪悪感と、この懐かしい感覚をもっと味わいたかった、という度し難い欲望だった。

あの日の夜、私は年甲斐もなく母恋しくなってしまった自分を深く恥じた。

しかしながら、私を抱きしめて安らかに眠っているココアさんを見ていると、別に恥じなくてもいいかな。とも思ってしまう。

「ココアさんが悪いんですからね」

彼女が先に、私を妹にしようとしたのだ。私も、ココアさんに母を求めて何が悪い。

だから、昼間の

——私を姉だと思って何でも言っ

という言葉には、私はこう返す。ただし、彼女に決して悟られないように心の中で。

——私のお母さんになつてください。

この願いは、彼女の言葉とどうしても矛盾する。という事実には目を瞑ったまま、である。

o u t r o

よう、マスター、また来たぜ。

またココアか、って？

それもいいが、最近はカプチーノにはまってるな。いや、バーになつてる夜のこの店でただのコーヒーは頼まんさ。ほんとに飲みたきや昼間行く。

カフェ・コレット——こいつは昼間は飲めんだろう？ 一つ頼むよ。酒は任せる。

なあマスター。

コーヒー、ミルク、酒、この組み合わせで、一般的にミルクだけが子供の飲み物で、あとは大人の飲み物って認識になつてるよな。

ミルクは母乳を連想させるからな。

で、カプチーノ、つてのはブラック（ミルクなし）にはできない。

ん？ 『お前はいつもよく分からんことばかり言いおつて？ まあそう慌てなさんなウサ公。俺が言いたいのは……』

お、これがカフェ・コレットか。

実は、俺はカフェ・コレットを飲んだことがないんだ。冷めないうちに飲みたいから、話はまた後でな、ウサ公。

二羽：Th・Des・Aliz・s

intro

裏世界の情報？ 俺の見た目が情報屋っぽいつて？ ハッハッハ、嬢ちゃん面白いな。

そうさな……喋るウサギのバー、ありつたけの夢をかき集めたひとつなぎの大シスト、白い粉を運ぶ女。最近のトレンドはこんなところだな。そんな目を輝かせたつて駄目だぜ。俺が情報を売るのは小洒落たバーにいるときだけだ。紅茶屋じゃあなあ……ハッハッハ。

……おっと、すまねえ。紅茶屋じゃなくてハーブティーショップだったな。店員の嬢ちゃん。

すまねえついでに注文良いか？

『ティー・オブ・ザ・トレードウインド』これを頼む。

ん？ どうした相席の嬢ちゃん方。そんなカッコいい名前の茶があつたのか、つて？

貿易風のお茶……ウサ公乗つけた嬢ちゃん物知りだな。そうだよ。直訳だとそうなるみたいだな。

ただ、"trade wind" ってのは、ある決まった経路を吹く風”って意味もあつたらしい。

だから、これを訳すなら……『いつも吹く風のお茶』、つてどこか。このお茶はきつと爽やかで、それでいて安心感のある味なんだろう。決して『かつこいい味』なんかじゃない。

ん？ どうしたウサ公、「仏語で言え」？ハッハッハ、こりや一本取られたな。

……おお、これがそのお茶か。どれどれ……ん？電話か。悪いな嬢ちゃん方、少し外すぜ。

Th・Des・Aliz・s

私は、男らしいさばさばとした性格の女の子である……と自負している。

この性格は、元軍人の父に男手ひとつで育てられたことによるものだ。

父は私に、自分がいつ死んでもいいようにと、私が一人で生きていくために必要なありとあらゆることを叩き込んだ。もちろん軍隊式でだ。

でも、父は虐待と教育をはき違えるような破綻者ではなかったために、私はひねくれることはなかった。

ただ、女の子の育て方としては、そこに『女の子』らしさはいささか以上に欠如していた。

父もそのことを危惧していたようで、私を、いわゆるお嬢様学校に入れることでそれらを学ばせようとした。

結果として、お嬢様の振る舞いを身に着けることができた。しかしながら、お嬢様学校という環境は、私を決定的に拗らせました。

女の園というのは、往々にして男性性に飢えているモノだ。

私は、可愛く、というよりもカッコ良く振舞うことを望まれた。

私に対して黄色い声援を送る彼女たちはきつと、私の『女の子』らしさには興味がないのだ。

その無関心へのあてつけのように、私は髪を高めのツーサイドアップにしている。いわゆるツインテールだ。この髪型は、高校生がやるには少し勇気がいる。

まあ、その当て付けを汲む人はいなかったが。

そんなこんなで日々は過ぎ、私は、父の知り合いがやっている喫茶店のバイトを始めた。

店主の娘とも順調に仲良くなり、そこそこの日々を送っていた。

この喫茶店の中では、私は普通の女の子でいても何も言われなかった。

一緒に働いている店主の娘——チノは私の自律性、いわゆる大人っ

ぼさに憧れており、私が学校で求められるような男らしさを求めなかつたからだ。

そんなある日。

「征服♪ 征服♪」

軍人仕込みの私の耳が、おかしいな漢字（Conquest）をあてはめているが、この際どうでもいい。

声だけでわかった。コイツは可愛い女の子だ、と。

下着姿のまま、とつさにクロゼットの中に身を潜めてしまった。いつもの外面の『カッコいい女子』を演じたくはなかったのだ。

だが、完全に気配を消していたにもかかわらず、彼女は私を見つけてしまった。

……結局、彼女はチノと同じで私に男らしい振る舞いを求めなかつたのだが。

彼女——ココアはのうてんきそうに見えて、ひどく繊細かつ慎重な側面がある。他人から『無能である』と思われることに対しての強い忌避感などがそうだ。

私は、ココアが『普通の女の子』であることを羨ましく思った。

私にとってはその普通さが、得難い特権であるかのように思えたのだ。

だからだろうか、魑魅魍魎も恥じらう乙女・ロゼを爆誕させてしまったのは……

あの時は、私はリゼだと名乗る気にはなれなかった。

自分が今まで嫌々ながらも築いてきた、男らしいさばさばとした性格の女の子である、という自負に、自身が執着しているのに気付いた。

もはや自分は、『普通の女の子』にはなれないのだと、思った。

形を取り繕うことはできる、立ち居振る舞いも可能だ。でも今までの自分のイメージがそれを許さなかった。

「ハイドとジキルだなそりゃ」

父の仕事の関係でたまにうちに来る運送屋の壮年の男性は私のことをそう評した。

間違っではない。

普通（ハイド）にあこがれる女の子（リゼ）がいて、それでも周囲のイメージ（ジキル）は崩したくなってロゼが生まれるのだから。

V i n r o s

よう、調子はどうだい？ 雇い主さま。

あんたがこの店に俺を呼ぶなんて珍しいな。どういう風の吹き回しだ？

……まあいい。報酬分の仕事はする。今回は何だ……ふむ、承知した。

——マスター、ロゼワインを頼む。

お、何だウサ公。『貴様にしちゃ何の捻りもない』？ ああそうだな。今日は久々に『神の血』を呑んでおきたかったのさ。別に基督教じゃないがね。

赤（ロツソ）でも、白（ビアンコ）でもない中途半端な紅。

これがいんだよ、これが。

赤の大人っぽさと白の飲みやすさのハイブリッド。

女と少女の境目。

なんていうと変態っぽいけど、でもこの時期の女は一種の魔性を宿す時がある。

『恋する乙女は戦争屋』ってやつだな。

なんだ、ウサ公『本物の戦争屋風情が何を偉そうに、あと神の血は赤ワインじゃ』だと？

……元は運送屋だったはずなんだがね。何処でこうなったんだか、ハツハツハ。